
ヒカルの碁 神の一手を極めし者

ソウルメイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒカルの碁 神の一手を極めし者

【Nコード】

N9957Z

【作者名】

ソウルメイジ

【あらすじ】

ヒカルと別れた佐為はある日突然再び現世へと舞い戻り、ある碁盤に宿る。

その碁盤をもつじいさんの孫であるユウはひょんなことで、幼なじみの小雪とともにじいさんの家に行くことになる。

そこで、その碁盤を見たユウは、ヒカルと同じようにサイと出会い、そこから物語が始まる。

あまり、うまくはできないかもしれませんが、見ていただけたとうれしいです。 よろしくお願いします

サイとの出会い

「結局、神童ヒカルも神の一手には届きそうにない。あの段階ではまだはやかったのだろうか？塔矢アキラも届かぬであろう。これでは私がつまらない。佐為、いま一度そなたを現世へと向かわせる。また新たな私への挑戦者・・・神の一手を極めし者を導いてくれ・・・」

あれ？私はなぜまたココにいる。私の役目はもう終わったはずだ。だからあの時私はヒカルの前から姿が消えた。ならばなぜ再び私はココにいる。

人のいる現世に・・・
どうして私は再びどの誰のものかもわからない碁盤に宿っているのだ？

わからない、だがきつと神様が再びこちらへ来てもいいと、そう思われたのだろう。

だったら、また私は待つ。虎次郎やヒカルのように、私を見つけてくれる人が来る日を・・・

「・・・きて・・・ねえ、起きてってば」

「・・・はっ！、おい、テストは？」

「とっくに終わったわよ、バカねえ、なんでテスト中に爆睡なんて

するのよ」

しまったあ、今日は真面目に受けようと思っていたのにいと早坂ユウは後悔していた。

「あんた、補習行き確定ね」

「そういう小雪だって、いつつもま・じ・めにテスト受けてても補習ばつかじゃん」

「あんただってかわないでしょ」

「そんな事ねえよ、俺はテスト今日みたいに真面目に受けねえから補習なんだよ。お前と一緒にすんな」

今の発言にイラツと来た小雪がユウの席の机をバンと叩く。

「結局補習なんだから一緒にじゃないっ！」

それに負けじとユウも椅子から立ち上がって反抗する。

「一緒にやねえよ、俺がテストを真面目に受けたら補習はおるか、学年で一桁取れる点数だつてとれるぜ」

「いったわねえええ」

「ああ、いったぜ」

白熱した二人の仲に、一人のクラスメイトが

「おいおい、夫婦漫才めおとはその辺にしておけよ」

といい、クラス中に笑いが起こった。

だが、二人はまだまだ納得できていないようで、フンツとお互いにそっぽを向いていた。

その日の授業が終わるころには二人はすっかり仲直りして、元の仲のいい二人の戻っていた。

というのも、この二人は家とはなり通しで、幼稚園そして、今通っている小学校でも6年間で一度もクラスが違わなかったというほど何もかもが一緒なのだ。

家が隣ということは当然下校も同じ道になる。さらにユウと小雪の

地域には6年生がユウと小雪二人しかいないため、二人での下校も当たり前となっていた。

いつものようにランドセルをもった小雪がユウの方へとやってくる。

「ユウ、帰ろ」

満面の笑顔でユウに向かって微笑みかける小雪。

「悪い、今日はちょっとジーちゃんのところにいこうとおもってるんだ」

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、私もつれてって」

さも、当然のように自分もつれ行くように言う小雪。

「なんでお前、ジーちゃん家なんて行きたがるんだ？」

「最近、顔だしてなかったし、せっかくユウが行くんだったら私もいこうかなって思ってたさ」

ユウのおじいちゃんである早坂源次郎の家は、ユウの家から歩いて5分という位置にある。源次郎は、誰にでも愛想がよく、幼稚園のころからユウとよく遊んでいた小雪は毎日のように

源次郎にの家に顔を出していた。当然ユウも一緒に、だ。だが、最近では学校も忙しく、しばらくお互い顔を出していなかったのだ。

しばらく考えた後で、特に問題ないと見たユウは

「じゃあ、行くか」といった。

それに続いて小雪も笑顔で

「うんっ！」

とうなずいた。

外は6月だというのに夏本番といったように暑かった。

その暑さに耐えながら二人は学校からしばらく歩き、ようやくユウと小雪は源次郎の家に到着した。

久しぶりだったからと言って特に道に迷うことなくすんなり来ることができたのは、本当に幸いだった。

ユウがチャームを押すと、中から、「はい、今行きます」としわがれた声がユウたちに聞こえ

その声は、小さいころから何も変わっていない、優しい声だったの
で一発でその声の主が源次郎だと二人はわかった。

声が聞こえて数秒後、ガラガラとドアが開いた。

そこから姿を現したのは、身長はやや小柄で前かがみになっていて、
髪の毛が見事に真っ白な

おじいさんが立っていた。源次郎だ。

源次郎は二人の顔を見ると、すこし驚いたようだったが、それでも
優しい表情はくずさずに

「おお、ユウ、それに小雪ちゃん。いらっしやい。」と言った。

それに対して二人も

「ただいま、ジーちゃん」

「こんにちわ」

とあいさつ。

「うちにお入り。外は暑かるう。アイスをだしてやる。」

その言葉を耳にした二人は、

「やったぜ」

「やったあ、うれしい」と口ぐちに喜びを言葉にしながら中に入っ
た。

家に入ってユウと小雪はリビングに、源次郎は台所へと向かった。
リビングについた二人が目にしたのは、碁盤だった。

テーブルが部屋の真ん中に置いてあって、そのすぐ右隣りに碁盤が
カバーをかぶせられておいてあった。

今まで、この家に来たときにそんなものがあつた記憶の無い二人に
とってこれは、大きな驚きだった。

と、同時に疑問でもあった。ジーちゃん「おじいさん」の家にこんなものあったかな？と。

しかし源次郎が台所からアイスを取って二人のもとへ来ると二人はすぐにそんな事なんか忘れて、アイスへと走っていった。

真ん中に広がる6人はすわれそうなかいかい机でアイスを食べ終わるとさっきの疑問が再びユウの頭をよぎり源次郎にその疑問をぶつけることにした。

「ジーちゃん、この台いつたい何に使うの？」

「ああ、それはのう、碁盤というものじゃ。そのカバーをとってみい」

そういつて碁盤をさす源次郎。碁盤のことをなにも知らないユウは恐る恐る碁盤のカバーを取った。

すると、そこには無数の傷のついたますめ361ある一般用の碁盤があった。

「ボロボロじゃん。なんでこんなものにカバーなんてかけてるんだよ」

すると、小雪と源次郎はユウが何を言ってるのかわからないと言った表情を浮かべた。

「何を言っておるんじゃユウ。この碁盤は先週買った新品じゃぞ。ほらこの通りピカピカではないか」

そういつてもう一度カバーを取る源次郎。

しかし、ユウにはどこをどう見ても古びた無数の傷をもつ碁盤にしか見えなかった。

すると、突然、ユウの心の中にある声が聞こえた。

この碁盤がボロボロにみえるのですか

「だからそういつてるじゃん」

あなたには私の声がきこえるのですか
えっ！？とユウは思った。今の声はいつたい誰だと。

私の声が聞こえるのですね

ユウは不安になって「誰だっ！？」と声を上げた。

ユウその様子に小雪と源次郎は不審感を抱き

二人して懸命に「ユウどうしたのじゃ」

「どうしちゃったの、ねえユウってば」と叫んでいる。

しかし、その声がユウに届くことはない

見つけた。ようやく見つけた。

どこか喜んでいるかのように聞こえるその声。ユウの不安はさらに増し、同時に身構える。

その様子を冷静に、見た源次郎は

「救急車じゃ。救急車を速くっ！」と小雪に叫ぶ。幻聴を聞いていると思っっているのだ。

あまねく神に感謝します。

すると、急に碁盤が光だし（ユウにしか見えていない）ある一人の男の姿が、ユウの前に現れた。

そこで、ユウは気を失った・・・。

サイとの出会い（後書き）

どうでしょうか？ヒカルの碁 神の一手を極めし者 楽しんでいただけただけでしょうか。

また、まだまだ初心者で拙い部分もあるかと思いますが、頑張っていると思っています。よろしくお願いします。

プロフィール

? 名前 早坂 ユウ

年齢 12歳（小学6年生）

身長 147cm

体重 36kg

特徴 髪の毛は少し長めで左腕にミサンガをしている。
運動が得意 勉強が苦手

好きな食べ物 オムライス

嫌いな食べ物 ゴーヤ、ピーマン

家族構成 ひとりっ子、両親は健在

父親は部長 母親はヘル

パー

? 名前 夢咲 小雪

年齢 12歳（小学6年生）

身長 139cm

体重 ひ・み・つ？

特徴 ユウの幼なじみ。ユウとは逆で右腕にミサンガをつけている。

ポニーテールで、気が強い。

好きな食べ物 基本的に甘いものなら何でもOK

嫌いな食べ物 しょうが、漬物 梅干し

家族構成 妹が1人 両親ともに健在。父親は単身赴任中

母親は主婦

？ 名前 早坂 源次郎

年齢 63歳

身長 148cm

体重 43？

特徴 髪の毛が真っ白。小柄で、頭がキレる。碁の経験あり。

年中にここにこしている

好きな食べ物 刺身、漬物

嫌いな食べ物

カレー、ハンバーグ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9957z/>

ヒカルの碁 神の一手を極めし者

2011年12月30日23時46分発行